

李白における安陸・南陽・襄陽の意義

——土地讃歌の手法をめぐる——

寺尾 剛

目次

- 一、序論～中国文学と土地との関係について
- 二、李白と安陸・南陽・襄陽及びその周辺関係の作品について
- 三、安州・隨州・唐州～「代寿山答孟少府移文書」「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰」を中心に
- 四、鄧州～「南都行」を中心に
- 五、襄州襄陽～「峴山懷古」「襄陽曲四首」「襄陽歌」を中心に
- 六、結語

一、序論～中国文学と土地との関係について

中国古典詩は唐代に入り、急速に土地との関わりを深めるようになっていった。

そもそも『詩経』の時代から、作品を地方別に分類するなど、土地に対する意識が強いというのが中国文学の一つの特色であった。屈原の作品においても、楚という土地柄を抜きには語れない。

漢代に入って、司馬相如が「子虚賦」によって楚の地を、「上林賦」によって長安上林苑を賛美し、揚雄が「蜀都賦」によって成都を賛美するなど、辞賦文学において土地讃歌は重要なテーマの一つとなった。ただ、漢賦においては、土地文学は都市、とりわけ長安・洛陽など大都市（及びその周辺、例えば御苑、終南山、首陽山等）の讃歌が主流を占めていた。傅毅「洛都賦」、班固「西都賦」「東都賦」、張衡「西京賦」「東京賦」

「南都賦」、徐幹「齊都賦」、楊修「許昌宮賦」、劉楨「魯都賦」などの漢賦はその代表的な例と言えよう。

魏晋南北朝時代に入り、土地讃歌の様相も変化してゆき、その対象は大都市だけに止まらず、農村・山林にまで拡張している。むしろ、左思の「三都賦」のように漢代の都市讃歌の流れを汲む傑作も生まれるが、一方、脱俗志向・隱遁思想といった時代精神を追い風として、脱都市化の文学も注目されてゆく。潘岳「籍田賦」「閑居賦」のように莊園・郷土への帰還を喜びとするもの、孫綽「遊天台山賦」や王彪之「廬山賦」のような山水遊覧の楽しみを謳歌するものなどが土地文学の様相を変質させてゆく。王朝・権力の象徴たる都市に対する嫌厭なり反抗が一つの原動力となり、都市生活からの解放、山水観賞の楽しみが文学の重要なテーマの一つとなる。土地文学という観点からすれば、これは対象の中心（特定の都市）から周縁（全国）への拡散である。換言すれば、誰もが周知の特定の大都市のみが対象となるのではなく、個人（作者）とのみ関わりの深い、読者にとっては不特定の未知なる土地も射程内に入ったことを意味する。

さらに重要なことは、この傾向が、辞賦文学だけでなく、この時代しだいに地位を確立していった詩歌のジャンルにも影響を与えたことである。とりわけ陶淵明が柴桑・廬山において郷土意識の強い作品を残し、謝靈運が「賞心」という彼の愛用語が象徴するような山水の楽しみを精緻に歌う作品を各地で残したことは重要である。特に謝靈運の場合、詩題・詩中に地名を明記している作品が多く、後の「詩跡」⁽¹⁾生成に大きな役割を果たしたと言えよう。

唐代に入り、この土地文学の拡散傾向は、詩歌の分野で一層拍車をかける。南北の統一、政情の安定化に伴い、道路交通網の整備が進み、地域社会が発展していくという過程の中で、全国規模で土地というものを考えなければならぬという発想が定着し普遍化していく。活動範囲が前代に比べて飛躍的に拡大した唐代の詩人にとって、広大にして様々な土地を知識として把握しておくことは緊急の課題の一つであったと考えられる。例えば「離別詩」にしても、自分あるいは相手かどのような所へ旅立つのかという点を詩に盛り込もうとするならば、その行き先の地に対する知識が多少とも必要となろう。唐代の場合、塞外や嶺南といった地に赴くケースすら稀でない。南北の統一によって、南方出身者も北方の知識が必要となり、北方出身者も南方の知識が必要となった。「離別詩」に限らず、唐代に飛躍的に発展する「羈旅詩」「懷古詩」「登高詩」「山水詩」といったジャンルも同様である。どこを旅し、どこを懷古し、どここの樓閣や山に登り、どここの山水を描くのか、といった点が重要になっていく（※）。

※ただし、「離別詩」においても、李白の「送友人」のように地理的理解が不必要な作品の中にも傑作が数多くあることも忘れてはならないし、「羈旅詩」「懷古詩」「登高詩」「山水詩」においてもそれは同様であるという⁽²⁾ことを付記しておく。本稿は、このような作例も多い一方で、地理的な理解が文学鑑賞の上で不可欠な作品が、唐代において相対的に増加している、という点に着目している。

このような時代の趨勢にあつて、文学者・詩人がある土地を描く際に、その土地になんらかの一定のイメージがすでに存在している方が描きやすい(典故・引用を重視する中国古典詩にとつてはなおさらである)。しかも、詩にするにふさわしいイメージであれば一層よい。唐代の詩人の作例を見てゆくと、この土地イメージの典型化・パターン化が、意識的にせよ無意識的にせよ、詩の制作に際して不断に行なわれ続けていることに気付く。例えば、瀟湘と言えば娥皇・女英に由来する女性的イメージ、長沙と言えば賈誼に由来する左遷のイメージ、武陵と言えば陶淵明「桃花源記」に由来する理想郷のイメージ、金陵と言えば懷古の情と佳麗な文化のイメージ(詩人が建康・江寧・昇州という名称を避け、美的な「金陵」という古名を選択する傾向にあることにも注意)、武漢と言えば黃鶴樓と長江のイメージ、鸚鵡洲と言えば禰衡に由来する狂癡と懷才不遇のイメージ、宣城と言えば謝朓とその清麗な詩のイメージ、渭橋と言えば離別と西域への旅のイメージ；等々。

むしろ行動半径の広がりに伴って、過去においてほとんど注目されていなかった地に立ち寄ることも多くなる。唐詩人はそのような土地においても、何らかの手法を用いてイメージ作りをする。李白が、過去においてほとんど顧みられることのなかった秋浦の地を秋のイメージで統一することによって印象付けたり、無名の九華山を改名という手段で著名にしたりした作業は、その好例であろう。⁽²⁾

このような唐詩の動きを通時的に跡付けてみると、まず初唐の段階では、王勃「滕王閣」「蜀中九日」、盧照鄰「長安古意」「文翁講堂」「相如琴台」、駱賓王「帝京篇」「靈隱寺」「易水送別」、李百葉「郢城懷古」、蘇頲「汾上驚秋」、杜審言「渡湘江」、沈佺期「亡山」、劉庭芝「代悲白頭翁」、張若虛「春江花月夜」、劉希夷「巫山懷古」「蜀城懷古」「洛川懷古」といった作品が、土地イメージを効果的に活用した作例として容易に思い浮かべられる。盧照鄰「長安古意」や駱賓王「帝京篇」は、伝統的な都市讚歌の文学を、詩歌によって再活性化させたものと位置付けることも可能であるし、王勃「滕王閣」などは、ほとんど無名であった建築物を全国区にまで引き上げた作例として意義深い。いずれにせよ、空間的な広がりといい、土地イメージの活用・典型化といい、前代とは比較にならないほどの進歩を見せている。

初唐から盛唐への架け橋的な役割を果たした詩人の中では、陳子昂の功績が大きいであろう。彼は故郷の蜀地、例えば峨眉山等を詩にしばしば詠み込んでいただけでなく、「登幽州台歌」「薊丘覽古贈居士盧藏用」「白帝城懷古」「峴山懷古」など、各地にわたって土地と密接に関わる作品を生み出している。また、高級官僚であり、当時の文士たちに多大な影響力を持っていた張説や張九齡といった文壇の大御所らが、その政治的浮沈に伴って、全国各地を歴遊し、土地々々で優れた作品を生み出していたという事実も注目されよう。これら初唐の傾向に一層の拍車をかけ、直接的に盛唐の詩人たちに多大な影響を与えた詩人が孟浩然である。彼は地元の襄陽において多くの名勝古跡を詩に詠じたばかりでなく(詳細は第五節参照)、全国各地を巡り(主に長江以南)、「彭蠡湖中望廬山」「晚泊尋陽望廬山」「宿武陵即事」「揚子津望京口」「与顔錢塘登樟亭望潮作」「宿建德江」「尋天台山」「耶溪泛舟」「望洞庭湖贈張丞相」「夜渡湘水」等々、数々の土地を題材・素材とした傑作を残している。孟浩然是、確たる郷土

愛を持ち続けていたという点で陶淵明に類似するが、詩中に地名を頻繁に活用するという意味では、謝靈運に類似する。しかし、謝靈運が多くは未知の土地を開発したのに対し、彼の場合、ある程度知名度のある土地に焦点を絞り、その地の個性を印象的にクローズアップし、典型化しようという試みが見られる（とりわけ「望洞庭湖贈張丞相」などはその典型的な例）。換言すれば、孟浩然是陶淵明・謝靈運によって開かれた「土地詩」のジャンルに、新風を吹き込んだ詩人と見做すことが可能である。孟浩然と直接的・間接的に繋がりのある次世代の詩人、即ち王維・王昌齡・李白・杜甫・岑参等が、それぞれ独自の「土地詩」「土地文学」を開発していったのは偶然ではあるまい。孟浩然是その意味で、極めて重要な詩人の一人として再検討する必要がある。

筆者（寺尾）は、これまでの拙論を通じて、以上のような「土地詩」「土地文学」史研究の一環として、詩の介在する名勝古跡、あるいは詩によって特定のイメージが付与された土地などを「詩跡」（「詩的古跡」と命名し、これを一つのキーワードとして「土地」と「文学（特に詩）」との関係を考察してきた（同時に、李白を、土地を「詩跡」化するのにとりわけ秀でた詩人の一人と規定し、さらに彼の場合、それが自覚的・意図的に試みられている可能性が強いということも指摘してきた⁴）。今回、あえて『詩経』から孟浩然までの流れを大略的に概述したのは、一つには、李白が「土地文学」史上多大な功績を挙げることができたのは単なる偶然ではないこと、時代的にその用意がすでに成されていたことを確認する必要があると考えたため、今一つには、本稿に述べる李白と安陸・南陽・襄陽を中心とした地域（いわゆる李白安陸時代の湖北北部を中心とする一帯）との関係を考察する上で、以上のような「土地詩」「土地文学」「土地文学」史の流れが大なり小なり絡んでくるためである。若き日の、名声を求め求職活動に明け暮れていた時代の李白が、司馬相如、張衡、陶淵明、謝靈運、孟浩然といった先人達の優れた「土地文学」の業績がある中で、いかなる可能性を発掘し、自らの独自性を際立たせようとしたか——その努力の跡を見据えることが、とりもなおさず唐代文学における「土地文学」あるいは「詩跡」の発展の軌跡を垣間見る一助となるように思われるのである。

二、李白と安陸・南陽・襄陽及びその周辺関係の作品について

周知のように、李白は二十代半ばで故郷の蜀を後にして、最初の大旅行を執行する。その後、二十七歳頃、許氏との結婚を機に安陸（現・湖北省安陸市）に一応の定住地を定める。以後、凡そ十余年間は、ここを拠点として活動するわけであるが、その間の行動範囲は極めて広く、湖北省一帯に止まらず、長安・洛陽一帯、山西省太原、江蘇省揚州・蘇州、浙江省杭州等にも足を延ばしていたようである（むろん安陸時代の李白の行跡については諸説あるが、目まぐるしく旅をしていたことだけは確かである）。いかにも非定住型の詩人、羈旅の詩人といった感があるが、本稿

では、焦点を絞って、この安陸周辺、北部でも終南山（秦嶺山脈）以南の地に関する李白の作例を見ていくことにする。

まず、基礎的な作業として、李白がこの地一帯について言及している作例を列挙してみることにしたい。具体的には、唐代の安州・随州・唐州・鄧州・襄州一帯である（なお、荊州については長江との関係で述べるのがふさわしいと思われるので別稿に譲ることにする。また沔州についてはすでに拙稿「李白における武漢の意義」⁵⁾において詳述しておいた）。

次に挙げる〈表〉は、現存する李白詩の、詩題及び詩序・詩中にこの地の地名が登場する作品の一覧である（破線以下は詩以外の作品）。体例については拙稿「李白における武漢の意義」P.75を参照のこと。制作年代については、安旗主編『李白全集編年注釈』に従っているが、周知のごとく、李白詩の編年については異説が多いので、一応の目安といった程度で参照して欲しい。

次に、この表に従って、李白の詩（及び詩題・詩序）に現われたこの地方の地名の用例数を州ごとに整理してみると、ほぼ次のようになる（一作品中に重複して現われた場合、一首に数える。また詩以外の作品〔以下「文」と総称する〕は、一連の拙稿の〈表〉の体例に従って、用例数に含まないこととする。但し文にのみ見えるものでも、重要と思われる地名については適宜解説を加えておく）。

〈安州〉

安州（二首。唐代の淮南道安州。州治は安陸。古くは春秋時代の鄆^{えん}（邲）国。鄆（邲）については文に三例見える）

安陸（一首。安州の州治所在地）

白兆山（一首。安陸西三十里にある。『北周書』『北史』に安州刺史于翼がここで祈雨したという記事が見える。一名、碧山。現在、安陸のラン

ドマーク的存在。李白讀書台もここにある）

桃花巖（一首。白兆山西麓にある）

般若寺（一首。張昕・余從新「李白在安陸遺址遺跡介紹」〔李白在安陸⁶⁾所収〕は白兆寺〔旧称通慧寺〕のことと推定する）

救苦寺（「上安州李長史書」に「春遊救苦寺」詩一首十韻）と見えるが詩は現存しない。『方輿勝覽』卷三一「德安府」に「在府西四里、今名

勝業院」とある。

石巖寺（「上安州李長史書」に「石巖寺」詩一首八韻）と見えるが詩は現存しない。『方輿勝覽』卷三一「德安府」に「石巖山、在府南十里」

〈表〉襄州・安州・随州・鄧州・唐州（付・汝州葉県石門山）詩文一覽

作品番号	作品名	製作地	種別	地名（詩題、詩序、詩中）	制作年代
761	峴山懷古	襄陽	懷古	峴山、峴首、襄中	727
415	寄弄月溪吳山人	〃	寄	洞湖、鹿門、襄陽	〃
731	安州応城玉女湯作	応城	行役	安州、応城、玉女湯、七沢	729
309	読諸葛武侯伝書懷贈長安崔少府叔封昆季	長安	贈	南陽	730
613	酬坊州王司馬与閻正字对雪見贈	坊州	酬答	宛	731
470	留別王司馬嵩	坊州？	別	南陽	〃
939	寄遠 其四	？	閨情	湖陽水	〃
942	寄遠 其七	？	閨情	春陵、漢江	〃
633	遊南陽白水登石激作	南陽	遊宴	南陽、白水（二例）、石激	732
634	遊南陽清冷泉	〃	〃	南陽、清冷泉	〃
907	題随州紫陽先生壁	随州	題詠	随州	〃
413	安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰	安陸	寄	安陸、白兆山、桃花巖（二例）	733
793	安州般若寺水閣納涼喜遇薛員外父	安陸？	閑適	安州、般若寺	〃
207	襄陽歌	襄陽	歌吟	襄陽（二例）、峴山、漢水、羊公（一片）石	734
143	襄陽曲 其一	〃	樂府	襄陽（二例）	〃
144	〃 其二	〃	〃	襄陽、高陽	〃
145	〃 其三	〃	〃	襄陽、漢江、峴山、墮淚碑	〃
146	〃 其四	〃	〃	襄陽（二例）、習家池、墮淚碑	〃
147	大堤曲	〃	〃	大堤（三例）、漢水、襄陽	〃
289	贈從兄襄陽少府皓	〃	贈	襄陽、春陵	〃
419	秋夜宿龍門香山寺奉寄王方城十七丈奉国瑩上人從弟…	洛陽	寄	方城	736
208	南都行	南陽	歌吟	南都、武關、白水、宛、紅陽城、白河湾	738
500	南陽送客	〃	送	南陽	〃
323	鄴中贈王大勳入高鳳石門山幽居	安陽	〃	高鳳石門山、南都城	739

333	憶襄陽旧遊贈馬少府巨	曹州	贈	襄陽、大堤、山公樓、峴山	740
084	上雲樂	長安?	樂府	白水	743
318	贈參寥子	?	贈	峴山	744
635	尋魯城北范居士失道落蒼耳 中見范置酒摘蒼耳	東魯	遊宴	高陽池	745
515	魯郡堯祠送竇明府薄華還西 京	〃	送	高陽	746
427	憶旧遊寄譙郡元參軍	東魯?	寄	仙城、漢東(二例)、餐霞 樓	751
423	聞丹丘子於城北山營石門幽 居中有高鳳遺跡…	東魯?	寄	城北山、石門(二例)、高 鳳遺跡	〃
792	尋高鳳石門山中元丹丘	葉県	閑適	高鳳石門山	〃
791	与元丹丘方城寺談玄作	方城	〃	方城寺	〃
828	憶崔郎中宗之遊南陽遺吾孔 子琴撫之潸然感旧	洛陽?	懷思	南陽(二例)、独山、白水、 菊潭	753
393	贈宣城趙太守悦	宣城	贈	南陽	755
262	永王東巡歌 其十	?	歌吟	雲夢	757
719	秋登巴陵望洞庭	巴陵	登覽	雲夢	759
584	江夏送倩公婦漢東併序	江夏	送	漢東(四例)、新松之山	〃
601	酬談少府	?	酬答	荆峴	760
999	大獵賦	蜀中?	古賦	夢沢	720
1008	代寿山答孟少府移文書	安陸	書	寿山	727
1023	早春於江夏送蔡十還雲夢序	江夏	序	雲夢(二例)	728
1010	上安州李長史書	安陸	書	安州、邳城、救苦寺、石巖 寺	729
1028	秋夜於安府送孟贊府兄還都 序	〃	序	安府	〃
1014	上安州裴長史書	〃	書	安州、雲夢、七沢、鄖国	730
1030	冬夜於隨州紫陽先生餐霞樓 送煙子元演隱仙城山序	隨州	序	隨州、餐霞樓、仙城山、仙 城	732
1031	送戴十五帰衡岳序	安陸	〃	邳国	733
1003	惜余春賦	?	古賦	峴北	738or9
1040	方城張少公厅画師猛讚	方城	讚	方城	751
1021	秋於敬亭送從姪崑遊廬山序	宣城	序	雲夢、七沢、安陸	753
1059	武昌宰韓君去思頌碑	武昌	碑	南陽	757

ている)

新松之山(一首。随州城の東。胡紫陽を葬った地)

春陵(二首。随州棗陽県付近。『通典』卷一七七に「随州棗陽、又有漢春陵故城、在県東」とある。後漢光武帝宅があつた所として知られる(『後漢書』「光武帝紀」注)。章陵とも言う)

〈唐州(付・汝州葉県)〉

湖陽水(一首。唐州湖陽県を流れる比水のこと。湖陽の名は後漢光武帝が姉を湖陽公主に封じたことで知られる)

方城(一首。唐州方城県、あるいはその北の汝州葉県との境にある山の名。『元和郡県志』卷二二に「方城山在〔方城〕県東北五十里、即沮澗耦耕処」とある)

方城寺(一首。方城山上にある寺院)

高鳳石門山(二首。高鳳は後漢の南陽郡葉県(唐の汝州葉県)出身の隠士で、西唐山(葉県西南)に隠棲し、授業したという人物(『後漢書』

「逸民伝」)。従つて、ここで李白の言う石門山は西唐山のこととするのが通説)

城北山(一首。石門山のこと)

石門(一首。石門山のこと)

高鳳遺跡(一首。石門山中の高鳳隠棲地のこと)

〈鄧州〉

南陽(七首。鄧州南陽県。後漢光武帝が旗揚げした際、基盤となつた記念の地であるので、洛陽の陪都「南都」として繁栄した。また前漢の宛県が置かれた地でもあるので宛、宛城とも称される。文学的には張衡「南都賦」で知られる。唐代には長安―商山―襄陽ルートから外れたため、州治は西南の穰県に譲っているが、洛陽―襄陽ルートの要衝としての役割は果たし続けた。ちなみに漢代の南陽郡の範囲は広く、例えば諸葛亮の隠棲地・南陽郡隆中は、唐代には襄州襄陽に属している。李白の「読諸葛武侯伝」に「当其南陽時、隴畝躬自耕」、「留別王司馬嵩」に「余亦南陽子、時為梁甫吟」とあるのは、隆中を指すと考えられるので注意を要する(但し李白は隆中を訪れた形跡はなく、また鄧州南陽県(現在の南陽市内)にも、後世の偽託とするのが通説であるが、諸葛亮隠棲地と伝えられる遺跡が古くから存在するので、李白がどちらを主に意識していたかは断定できない。例えば李白は南陽県城を歌う「南都行」にも「誰識臥龍客、長吟愁鬢斑」と、諸葛亮を登場させている)

南都〔城〕（二首。南陽〔県〕のこと）

宛（二首。南陽〔県〕のこと）

白水（四首。正式には清水と呼ばれていたが、張衡「南都賦」に「曜朱光於白水」とあるように文学的には白水の名が通っている〔現在の名称は「唐」白河〕。鄧州北境伏牛山系の一つ支離山を水源とし、鄧州東部を北から南に流れ、襄陽の東北で漢水〔沔水〕に合流する。南陽付近では、城の東郊を南下し、途中中西に折れて、ちょうど城の南西部を囲むような形で流れている。南陽の風光を象徴するランドマークの一つ。ちなみに『水経注』の「白水」とは別の河川）

白河湾（一首。白河は清水〔白水〕のこと。白河湾が地名であるのか、単に白河の入江という意味で使っているのかについては未詳）

紅陽城（一首。『漢書』『地理志』『南陽郡』に「紅陽〔県〕、侯国。莽曰紅愈」とあり、『嘉慶重修一統志』卷二一〇「南陽府」に「紅陽故城、在舞陽縣西北、紅山之南」とある。ただし舞陽縣は唐代には河南道許州〔潁川郡〕に属しており、それ以前にも、前漢を除いて基本的には南陽郡に属していない。また南陽城からは一〇〇キロ以上離れている。従って、李白が「南都行」という南陽をテーマとする作品に「走馬紅陽城、呼鷹白河湾」と、「紅陽城」を登場させた理由については一考を要する。むしろ、単に「白河湾」の「白」との色対を成す地名が欲しかったという事情もあるが、あるいは、舞陽縣が友人胡紫陽・元丹丘とゆかりの深い葉県方城山に近いため、南陽から彼らのもとに出向いた際に立ち寄ったという実体験に基づく発言かも知れない。なお舞陽縣には樊噲宅があるという程度で、重要な名勝古跡はそれほどない）

石激（一首。『大明一統志』卷三〇「南陽府」に「石激、在府城三里、清水還流、為一城之勝。可以禦水患而障城郭、其堅完礎石猶在。前賢題詠甚多」とある。石造の防水堤のようなものであったと考えられる）

清冷泉（一首。張衡「南都賦」に「耕父揚光於清冷之淵」「耕父」は、『山海經』に登場する神の名）とあり、『大明一統志』卷三〇「南陽府」に「豊山、在府城東北三十里。…下有泉曰清冷泉。神耕父処之、神来時水赤有光耀」とある。李白が「西輝逐流水」と歌うのは、あるいは夕陽で赤く染まる波に神の来迎を暗示しようとしたか）

独山（一首。『太平寰宇記』卷一四「鄧州南陽縣」に「独山在県西三十里。又隋『凶経』云、清水経独山」とあり、『大明一統志』卷三〇「南陽府」に「豫山、在府城東一十五里、…俗名独山」とある）

菊潭（一首。鄧州西北部、菊水のほとりにある泉、あるいは菊水のこと。『元和郡県志』卷二二「鄧州菊潭縣」に「菊水出県東石澗山。其旁多菊、水極甘馨、谷中三十余家不復穿井、仰飲此水、皆寿百余歳」とあり、『太平寰宇記』卷一四二「鄧州南陽縣」に「菊水、源出県東石澗山。一名菊潭水」とある鄧州の名所の一つ。李白も「時過菊水上、縦酒無休歇。泛此黄金花、頽然清歌発」と、この地の地名に着目し、更に陶淵明

の菊酒のイメージを重ねている)

〔襄州〕

襄陽(九首。襄陽の州治所在地。漢水と白水〔唐白河〕の合流点南岸にある〔北岸は樊城〕。長安・洛陽から荊州・沔州といった長江流域の諸都市に至るルートのほぼ中間点に位置する交通・軍事・商業ネットワークの要衝。従って文学的にも「詩跡」の宝庫で、多くの詩人がこの地を詠じている)

襄中(一首。襄陽のこと)

峴山(五首。襄陽城南にある山で、襄陽のシンボル、ランドマーク的存在。『元和郡県志』卷二「襄州襄陽県」に「峴山在県東南九里、山東臨漢水、古今大路」とある。別名中峴、羊公山。標高三六三メートル。)

峴首(一首。現在では峴山と峴首山は別の山とする説もあるが〔例えば『中華人民共和國地名詞典・湖北省』など〕、王琦が「峴首、謂峴山之巔。鮑照詩『晨登峴山首』、後人因之、遂謂峴山曰峴首。孟浩然『峴首晨風送』、馬戴『白雲登峴首』、皆本此」と述べるように、唐代では鮑照の詩句〔「從拜陵登京峴」に見える〕を出典とする峴山の巔の意であったと考えるのが適切であろう)

荆峴(一首。荆山と峴山のこと)

墮淚碑(二首。襄陽で善政を行なった西晋の羊祜を記念する碑。峴山の上にある。東晋・習鑿しやくざく菌『襄陽耆旧記』〔『襄陽記』〕に「祜築山水、每風景、必造峴山、置酒談詠、終日不倦。…祜卒後、襄陽百姓於祜平生遊憩之所、建碑立廟、歲時餐祭焉。望其碑者、莫不流涕。杜預因名為墮淚碑」とある。襄陽を代表する「詩跡」の一つ)

羊公(二片)石(一首。墮淚碑のこと)

山公楼(一首。王琦は「晋時山簡為襄陽太守、山公楼是其遺跡、今亡所在」と述べる。山簡ゆかりの地と言えば習家池であるから、おそらくその辺りに建てられた楼閣であろう)

習家池(一首。『襄陽耆旧記』に「襄陽峴山南八百步、西下道百步、有習家魚池。漢侍中習郁依范蠡養魚法、中築一釣台。…池辺有高堤皆種竹及長楸芙蓉覆水、是遊宴名処。山季倫〔山簡のこと〕每遊此地、未嘗不大醉而還。恒曰『此我高陽池也』」とある。襄陽を代表する「詩跡」の一つ)

高陽池(一首。習家池のこと。山簡が「此我高陽池也」と語ったことよって、習家池の別名として定着した。ちなみに「高陽」とは、自ら「高陽酒徒」と号し、舌先三寸で斉の七十余城を降した前漢の酈食其の故事を踏まえたもの)

高陽（二首）。高陽池の略。即ち習家池のこと）

大堤（二首）。大堤とも書く。襄陽城をとり囲む漢水・襄水・檀溪に沿って造られた堤防（この辺りの水害の多さは『三国志』の関羽の樊城水攻めでも知られるように古来から有名）。樂府題「大堤曲」によっても広く知られる。襄陽及びその南の宜城に至る漢水沿いの堤防一帯は、古来から交通の要路として栄え、多くの商店・妓楼・旅館が軒を列ねていた。南北朝時代から唐代にかけて、詩語としての「大堤」は、商賈や妓女を連想させる地名として定着していった。ちなみに「大堤」と言った場合、①襄陽一帯の堤防、②襄陽から宜城にかけての堤防、③宜城一帯の堤防、の三ケースがありうるが、李白の場合、一応①のケースと考えるとよい。なお当時の状況については嚴耕望『唐代交通図考』篇二八「荆襄驛道与大堤艷曲」に詳しい）

鹿門（一首）。山名。鹿門山のこと。襄陽城の東、漢水東岸にある山。峴山とともに襄陽を代表する山。『襄陽耆旧記』に「鹿門山、旧名蘇嶺山。建武中、習郁為侍中、時從光武幸黎丘、与帝通夢、見蘇嶺山神、光武嘉之、拜大鴻臚。録其前後功、封襄陽侯、使立蘇嶺祠。刻二石鹿、夾神道口、百姓謂之鹿門廟、或呼蘇嶺山為鹿門山」とある。後漢の逸民・龐徳公、唐詩人の孟浩然、皮日休隱棲の地として知られる）

洞湖（一首）。後漢の逸民・龐徳公隱棲の地。孟浩然「尋張五回夜園作」に「聞就龐徳公、移居近洞湖」とあり、李白も「嘗聞龐徳公、家住洞湖水」と語っている。また、『後漢書』「逸民伝」に「龐公者、南郡襄陽人也。居山之南、未嘗入府城」とあることから、洞湖は峴山の南にあつたと推定される。『輿地紀勝』卷八二「襄陽府」に「龐徳公宅、在山南広昌里、今廢」とある）

三、安州・随州・唐州の「代寿山答孟少府移文書」「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰」を中心に

まず安州・随州・唐州一带を見ていくことにしたい。

安州安陸は、総じて「詩跡」にしにくい土地柄である。地勢的に見ても、それほど高い山や特色ある山はなく、河川についても、漢水が流れているとは言え、漢水の支流の一つで、それほど大河でもない。『輿地紀勝』卷七七「徳安府」は「風俗形勝」の項において、安陸を「人境之勝」と称揚し、その説明として「鄭昂跨鼈堂記曰、西揖白兆峯巒、秀出、其下李太白之所廬、想見琴丹砂撫青海而陵八極也。北曰寿山、即太白所謂「攢吸霞雨、隱居靈僊」者也。」（『方輿勝覽』卷三一もほぼ同文）と述べているが、興味深いのは、白兆山・寿山いずれも李白の名とともに著名となつたと言わんばかりの記述の仕方である。李白の存在がなければ全国的に知られることがあつたか否かは疑問であろう。歴史的に見ても、春秋時代に鄭子国という小国があつたという程度で、それほど全国的に知られた大事件も発生しておらず、また著名な人物もあまり出ていない。唐初に活

躍した許氏（例えば許紹・許圜師^{きゐんし}）・郝氏（例えば郝処俊）といったこの地出身の氏族も、地元レベルではともかく、全国レベルでの知名度では今一つといった感は拭えない。

今日、この安陸の名が全国的に知られているのは、やはり、近年建設された李白紀念館をはじめとする数々の李白遺跡によってである。『李白在安陸』付録張昕・余從新著「李白在安陸遺址遺迹介紹⁽⁹⁾」には、李白遺跡として「白兆山」「桃花岩」「白兆寺」「李白讀書台」「太白堂」「紺珠泉」「白雲泉」「洗脚池」「洗筆池」「古銀杏樹」「長庚書院」「太白林」「大安寺」「救苦寺」「石岩寺」「太白樓」「五桂軒」「車蓋亭」が挙げられている。地志類を見ても、古く南宋期の『方輿勝覽』『輿地紀勝』の安陸（当時は德安府）の諸条も、その多くは、李白関係の、あるいは李白ゆかりの地の紹介に費やされている。少なくとも南宋期には、安陸と言えば李白、といったイメージが定着していたことは確かである。

むしろ、この「安陸即李白」というイメージが形成された理由としては、安陸がそれまで全国的にそれほど著名でない土地であったことと、そこに全国的に知名度の高い詩人である李白が訪れ、一時的にせよ定住したこと、この二つの事象が偶然に重なった結果にすぎないと考えることもできるが、その一方で、安陸の名を高めようとする、李白自身の意図的な努力や試みの成果として捉えることも可能である。「詩跡」論としては、その点こそ重要な論点となる。単に著名人が訪れたというだけでは、必ずしもその土地と人物は結びつかない。例えば王昌齡は江寧県尉として金陵を訪れており、後世、王江寧という別称まで定着しているにもかかわらず、その地に関する印象的な作品をほとんど残していないがゆえに、この両者はイメージ的にほとんど結びつかない（王昌齡と言えば、むしろ潤州〔鎮江〕、とりわけ芙蓉樓・万歳樓の方が遥かに強烈に結びつく）。事実、金陵には王昌齡に関するモニュメントは古来から全くと言ってよいほどない。

従って、まずはこの、李白の安陸「詩跡」化への「意図的な努力や試み」について考えてみたい。李白の安陸に関する言及例は、現存作品を見る限り、それほど多くはない。安陸全体（応城・雲夢を含む）でも、前節〈表〉に見たように、詩ではわずかに五首（「安州応城玉女湯作」「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御宿」「安州般若寺水閣納涼喜遇薛員外父」等）。文では、やや多く八篇（「代寿山答孟少府移文書」「上安州李長史書」「上安州裴長史書」等）となる。

その中から安陸に対する李白の描き方を見てみると、まず注目されるのは、「上安州裴長史書」における「以為士生則桑弧蓬矢、射乎四方、故知大丈夫必有四方之志。乃杖劍去國、辭親遠遊。南窮蒼梧、東涉溟海。見鄉人相如大誇雲夢之事、云楚有七沢、遂來觀焉。」という記述である。周知のように、これは李白自らが出蜀及び安陸來訪の理由を述べた部分で、李白伝記研究における重要な史料の一つとなっている箇所である。しかし「詩跡」論的に見ても興味深い点が二点ある。まず第一点は、安陸來訪の動機が、いわば今日的にいう「観光目的」のためであると強調している点である。むしろ当時の李白の状況から想像すれば、実際には必死の求職活動のためと考えるのが、動機としては最も自然である。しかし、

李白があえてこのような言い方をした理由を考えてみた場合、「制約なく自由に旅する観光者」というイメージこそが、彼にとつてのありうべき理想的自我であつたと仮定することが可能であろう。またそれが言い過ぎであるにしても、少なくとも他者からそのようなイメージで自己を見てもらいたいという願望の現われと取ることができよう。この「上安州裴長史書」は、三十歳頃のものであるということがほぼ確定できる伝記資料的に貴重な作品の一つであるが、それはまた、わずか三十歳にして、彼がすでに名勝古跡を尋ね歩くことを旅の目的の一つとして自覚的に認識し、実行しようとしていたことを物語る重要な資料と考えることもできよう。

第二点として、李白が安陸を述べるにあつて、知識人ならば誰もが知るところの司馬相如「子虛賦」に登場する雲夢を引き合いに出しているという点が注目される。いわゆる「雲夢之沢」は前述したように、その範圍は極めて広大で、場合によっては遙か西の洞庭湖をも含めうる呼称である（むろん安州には雲夢県という県が存在するが、それも安陸南約三〇キロに位置している）。しかし彼があえて雲夢を引き合いに出したのは、先に述べたように安陸が全国的にそれほど知られていない（少なくとも全国的に著名な「詩跡」に乏しい）地であつたためであろう。安陸は「雲夢之沢」の北のほずれに位置するとはいへ、一応この沼沢地の一部には入り得る。その点に李白は着眼したにちがいない。安陸の存在感を讀者に印象付けようとする李白の努力の跡が見て取れる一例である。つまり、李白は無名の土地を称揚する場合、著名な土地を引き合いに出して印象付けるといふ手法を系統的にしばしば用いており、このケースもそのバリエーションの一つと考えることができるのである。むろん詩人によっては今いる土地が全国的に著名であらうとなかろうと、それに全く関心のない者もいる。しかし李白という詩人は、そのことに無関心ではいられないタイプの詩人である。李白はしばしば指摘されるように自己顕示欲の強いタイプの詩人であると言えようが、彼の場合、あたかも自身の投影であるかのごとく、自らの訪問地に対してさえも強い顕示欲を示すのである。李白の歌う土地が「詩跡」化しやすいのも、このような李白自身の性格的な志向性が多いに関係しているように思われる。

李白が「無名」の安陸を全国的なレベルに引き上げようとする試みの今一つの好例として挙げられるのは、彼が安陸を「郢城」「郢国」（「文」に三例見える）と称している点である。安陸の名を知らない知識人であっても、当時の必読書の一つ『春秋』に登場する「郢国」の故地であるという点を指摘すれば、比較的容易に理解しイメージ化することができよう。むろんこのような手法は、李白に限らず詩人の常套手法の一つであるが、「詩跡」論的に見た場合、看過できない現象であると言える。

次に、李白と安陸との関係を見る上で最も重要と思われる「代寿山答孟少府移文書」と「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰」の二作品を、「詩跡」論の一環として検討してみることにはしたい。まず「代寿山答孟少府移文書」であるが、この作品は、李白が安陸を訪れた当初、付近の寿山に隠棲した際に、孟少府なる人物に対して、寿山に託して自らの抱負を語った書簡文である。李白の散文の中でも出色の作品として後世の評価も高い。

伝記論的に見れば、「近者逸人李白自峨眉而来、」以下の、彼自身の来歴や人生・政治等に関する抱負が語られている後半部が目されるが、「詩跡」論的に見た場合、むしろ寿山を擬人化し、寿山に土地論を語らせている前半部分のほうが重要となってくる。従って、まず以下にその前半部分を引用してみることにしたい。

代寿山答孟少府移文書

淮南小寿山、謹使東峰金衣双鶴、銜飛雲金書于維揚孟公足下曰、僕包大塊之氣、生洪荒之間。連翼軫之分野、控荆衡之遠勢。盤薄万古、邈然星河。憑天竄以結峰、倚斗極而橫嶂。頗能攢吸霞雨、隱居靈仙。産隋侯之明珠、蓄下氏之光宝、罄宇宙之美、殫造化之奇。方与崑崙抗行、闔風接境、何人間巫廬台霍之足陳耶。

昨于山人李白、処見吾子移文、責僕以多奇、鄙僕以特秀、而盛談三山五岳之美。謂僕小山無名、無德而稱焉。觀乎斯言、何太謬之甚也。吾子豈不聞乎。無名為天地之始、有名為万物之母。假令登封禪祀、曷足以大道譏耶。然能損人費物、庖殺致祭、暴殄草木、鑄刻金石、使載圖典、亦未足為貴乎。且達人莊生、常有余論、以為尺鷃不羨于鵬鳥、秋毫可併于泰山、由斯而談、何大小之殊也。(以下、山は賢者を養い、国家に貢献するといった旨を論じるが、省略する)

一読して、なによりまず奇抜に感じられるのは、山を擬人化し、山に自らの土地自慢をさせているという点であろう。李白が擬人表現を得意とする詩人であり、山に対してさえしばしば擬人化を行なっていることについては、すでに別稿で述べたことがある(例えば「陪従祖濟南太守泛鵲山湖、其三」の「遥看鵲山、却似送人来」、「登太白峰」の「太白与我語、为我開天闕」、「独坐敬亭山」の「相看兩不厭、只有敬亭山」など。詳細は拙稿「李白における擬人表現について」(絶句を中心に)⁽¹¹⁾を参照)。しかし、ここで注目すべきは、詩という形ではないにせよ、李白が、①すでに安陸時代初期から、この「山を擬人化する」という手法に着目していたことが確認できるということ、②無名の山に対してこの手法を活用して、読者に強い印象を与えているということ、という二点であろう。特に後者は、「詩跡」の生成という意味で注目される。李白が、無名の地を全国的に知られるようにするために尽力を注ぐタイプの詩人であり、その努力の跡は、彼の土地に関する作品に見られる様々な手法から読み取ることができる、ということについては、すでに拙論「李白における武漢の意義」⁽¹²⁾「李白と九華山の『詩跡』化について」⁽¹³⁾等に触れてきたが、この寿山に対しては、李白は擬人法という、奇抜でインパクトに富む手法を選択することによって、読者に強く印象付け、その名声を高めようとしているわけである。

擬人法もさることながら、さらに興味を引くのは、この文の内容である。李白は寿山を称揚するために、まず、彼の得意とする、壮大なスケールを感じさせる誇張的表現によって説き起こす。「僕、大塊の氣に包まれ、洪荒の間に生まる。翼軫よくんの分野に連なり、荆衡の遠勢を控ひかふ。盤薄たる万古よりし、邈然たる星河のごとし。天霓に憑り以て峰を結び、斗極に倚りて嶂を横たふ。頗る能く霞雨を攢吸し、靈仙を隠居せしむ。隋侯の明珠を産し、卞氏の光宝を蓄へ、宇宙の美を罄つし、造化の奇を殫つす」と。「大塊」「洪荒」「翼軫（星座名で、地上の楚の地に相当）」「荆衡（荊州と衡州）」「万古」「星河」「天霓」「斗極」「宇宙」「造化」と、あたかも宇宙論をたたかむかのような壮大な語彙の選択である。また文章的に見ても、李白らしい大胆さが随所に見え、強いインパクトを讀者に与えている。とりわけ、「翼軫の分野に連なり、荆衡の遠勢を控ふ」は安陸全体、「頗る能く霞雨を攢吸し、靈仙を隠居せしむ」は寿山の、それぞれ宣伝文句・キャッチフレーズとして、今日に至るまで、しばしば地方志、ガイドブック等に引用されている警句である（換言すれば、これらの句は、「詩跡」として安陸・寿山を捉える場合の重要なイメージの一つと成り得ていると言える）。この冒頭部分は、スケールの大きな大胆な表現を連続させることによって寿山の名声を限りなく高めようとする、李白の氣迫や苦慮が手に取るように見えてくる一節であると言えよう。

また、続く「方に崑崙と抗行し、閩風もんふうと境を接す、何ぞ人間の巫・廬・台・霍かく、陳ぶるに足らんや」という表現にも着目したい。この、名も無き寿山を仙山たる崑崙山・閩風山に比肩し、地上界の名山たる巫山・廬山・天台山・霍山を卑下するという発想は、むしろその誇張の極端さにも驚かされるが、同時に、李白の土地表現の特色という観点から見ても興味深い。李白がある土地（とりわけ無名の土地）を描く際、他の土地を引き合いに出し、比較法・抑揚法といった手法を通じて、その当該の土地を称揚するというケースが系統的に見られるということは、すでに拙稿「李白における越地方の意義」⁽¹⁴⁾等において詳述した（特に越地方の山水が引き合いに出されることが多い）。李白は、この寿山においてもその手法を採用しているわけである。この手法が集中的に数多く見られるのは主として中晩年以降（とりわけ安徽省皖南において）である。それだけに、この作品がこの手法の早期の段階での試みの一つとして位置付けることができるというのは、「詩跡」論的に見ても極めて興味深い。李白が土地讃歌を、あるいは土地の「詩跡」化を、かなり若い時期から意図的に試みようとしていた可能性を傍証する、重要な手掛りとなり得るからである。

また、「昨于山人李白処見吾子移文……」以下の部分も、李白が、寿山が「無名」であるという点に強い関心を寄せている——と言うより、異様なほどのこだわりを見せている——という点に興味を持たれる。李白のこの心理をどう捉えればよいであろうか。少なくともこの作品から窺えることは、「近者逸人李白……」以下に見える彼の強い自己顕示欲・仕官願望からも推察できるように、寿山は彼の心の投影であり、ともに無名であるという共通項を持った共感者であるということであろう。一方で『莊子』を持ち出し、無名者の自己弁護を行ないながら、一方で無名であることに対する苛立ちや焦燥感が見え隠れする、といった自己矛盾をこの作品は孕んでいる。李白は、名声を得た後にも、無名の土地や山水を称揚す

る試みを絶えず繰り返しているが（「秋浦」「九華山」「五松山」など多数）、彼の心理の基層部分において、この「酒隠安陸、蹉跎十年」と自ら顧みる、若き日の無名時代における土地との関わり方の体験が、後々まで脈々と流れ続けているように思われる。生涯を旅に生きることを宿命付けられた詩人が、その流れ着く数々の仮寓地において、常に自己の存在を確認し続けてゆくには、その訪問地を、時には自己と同一視・一体化し、時には共感者として愛好し、時には羨望の対象として憧憬するなど、土地と自己とを不断に関連づけてゆかざるを得なかったのではないだろうか。その李白の思考の原点とも言うべき作品として、この「代寿山答孟少府移文書」は重要な意味を持つように思われるのである。

安陸における李白の作品の中で、今一つ重要なものとして挙げられるのは、言うまでもなく「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰」である。まずはその全文を掲載してみることにしたい。

安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰

雲臥三十年、好閑復愛仙。
蓬壺雖冥絕、鸞鳳心悠然。
婦來桃花巖、得憩雲窓眠。
對嶺人共語、飲潭猿相連。
時昇翠微上、邈若羅浮顛。
兩岑抱東壑、一嶂橫西天。
樹雜日易隱、崖傾月難圓。
芳草換野色、飛蘿搖春烟。
入遠構石室、選幽開山田。
独此林下意、杳無区中緣。
永辭霜台客、千載方來旋。

一首全体にわたって、白兆山の山水美とそこでの隠棲の楽しみが一貫して述べられている、李白早期の佳作の一つと言ってよい作品である。李

白らしさと言う意味でも、「蓬壺 冥絶すと雖も、鸞鳳 心 悠然たり」といったような神仙的雰囲気、「時に翠微の上に昇れば、邈として羅浮（中国南方の名山）の顛の若し」といったような他の土地を引き合いに出して称揚するといった手法、「兩岑 東壑を抱き、一嶂 西天に横たふ」といったような具体的でスケールの大きな自然描写、「嶺に対して 人 共に語る」や「崖傾きて 月 円かなり難し」といったような誇張的で奇抜な発想等々、李白の個性がよく現われている作品と言える。また、「詩跡」論的に見ても、これらの佳句は、後世、白兆山が「詩跡」化され、様々な詩人によって継承される際に、極めて有効なものとなっていると言えよう。

事実、白兆山は「李白在安陸遺址遺迹介紹」（前掲）に「自李白始、歴代名人、選勝題詠者、不可勝数。」（『安陸県志』）宋代宋祁、范雍、元代貫雲石、明代何遷等均有題詠白兆山の詩作。」と記され、また桃花巖（岩）も「歴代文人墨客、亦覓李白踪跡、以桃花岩為遊覽勝地、留下了不少動人詩篇。」（いずれも傍点寺尾）と記されているように、まさに安陸を代表する「詩跡」の一つとなって定着している。¹⁵李白の後世における名声と、この「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御結」詩がもたらした成果と言えらるであろう。

「詩跡」論から見ても、さらに興味深いのは、李白の代表作の一つ「山中問答」の起句「問余何意棲碧山」の「碧山」が白兆山のことであるという伝承があるという点である（通説ではこの「碧山」は単に「青々とした山」という意の普通名詞）。陳建平「李白在安陸十年詩文繫年」（前掲）「李白在安陸」所収）によれば、「安陸県志・金石」：「李太白山中問答絶句碑、無年号、何字度書、在白兆寺。」又「県志・人物」：「明、何字度、字仁仲、夔州別駕。」另、元代貫雲石「桃花岩」詩云：「桃花染雨入白兆：流水杳然心自閑。」蓋從元明以來、皆認為此詩作于安陸白兆山。」とあり、また『大明一統志』『大清一統志』等の全国レベルの地理書も、白兆山を一名「碧山」としている。おそらく、元の貫雲石が『桃花岩』詩において、たまたま「山中問答」の詩句を踏まえたことを、後世の者が曲解して、「山中問答」の「碧山」を白兆山と早断してしまったというのが真相であろうと考えられ、伝記研究的には慎重に取り扱わなければならないことは論を俟たない。しかし「詩跡」論的には、極めて興味深い現象と言えよう。これに類似した例として有名なのは、「送友人」の「青山橫北郭、白水遶東城」の「白水」が、普通名詞ではなく南陽を流れる白水のこととする説である。また、李白のケースではないが、最も著名な例としては、杜牧「清明」に見える「杏花村」の所在地に関する論争がよく知られている。

これらの異説・論争が発生する要因の一つに、当該地の地元民の根強い郷土愛が挙げられるであろう。そこには、自らの住む地や郷土が著名人ゆかりの地であって欲しい、名著名作の生まれた地であって欲しいといった「お国自慢」「村興し」的願望が底流として流れていると考えられる。李白に関しては、とりわけしばしば、このような地元民の郷土愛と密接に関わる現象が見られるのである。安陸においてはこの「碧山」だけではない。『輿地紀勝』『徳安府』『詩』に「令人却憶保寧寺、二水三山李白詩（李楫「鳳凰台」）」とあるが、これは、安陸の東二里にある鳳凰台（李

白を記念したものが否かは不明)を歌ったもの。この詩句は明らかに李白の「登金陵鳳凰台」の「二(本来「一」が適切)水中分白鷺洲、三山半落青天外」を踏まえたもので、安陸の鳳凰台を金陵のそれにあやかろうとしている意図は明白である。仮に李白のこの作品の詩題に「金陵」がなかったならば、後世、ここの鳳凰台も制作地の一つとして名乗りを挙げていた可能性も否定できない。また、「安州水西寺、李白旧題詩。今古已堪嘆、風煙独昔時(張之才)」とあるが、これは李白の「遊水西簡鄭明府」に見える。「水西寺」にちなむ。この寺が安徽省皖南の涇県にあることは、杜牧がこの地において李白を踏まえて作詩していることから明らかであるが、張之才の場合、その書き方から推して、安州のそれと誤解していた可能性は極めて高い。まさに安陸は、数々の李白遺跡も含めて、李白とともに生きてきた土地とすることができよう。土地の「詩跡」化とは、その意味で、作者と地元民との共同作業の所産とも考え得る。臆説や伝承にすぎなくとも、その中に「詩跡」生成発展のための、重要な要素が含まれていることが少なくないのである。

なお、安州に関しては、寿山・白兆山の他、李白は当時から著名な温泉池である応城の「玉女湯」についても歌っており、この温泉は現在もお李白の名とともに広く知られている。また、安陸の救苦寺は、李白が李長史に献上した三作品の一つ「春遊救苦寺」詩に見える寺であるが、『方輿勝覽』『輿地紀勝』等の南宋の地志類には李白の名とともに取り上げられている。詩自体、すでに早くから散佚してしまっており、またそのものも、南宋時には「勝業院」と名称を換えているにもかかわらずである。李白の足跡を執拗に追おうとする人々の情熱が感ぜられて興味深い。このような現象もまた、李白人気というものが土地と強固に結びついていることを示す好例の一つと見てよいであろう。

次に、随州・唐州について簡単に触れておきたい。まず随州関係の土地については、詩五首、文一篇に登場している。「随州」「漢東」「餐霞楼」「仙城」「新松(之)山」「春陵」といった地名が見える。随州においては、李白の関心は主として師と仰ぐ胡紫陽という人物に向けられており、土地に対しては、それほど際立った発言は見られない。そもそも随州自体、安州ほどではないにせよ、それほど名勝古跡の多いところではない。しかし、そのような状況下においても、断片的ながら、彼の随州を称揚しようという姿勢は見取れる。例えば、随州と言えば、まず第一に思い浮かぶのは神農氏炎帝出生の地としてのイメージであるが、李白はそのイメージを活用する。例えば「神農好長生、風俗久已成。復聞紫陽客、早署丹台名。……(題随州紫陽先生壁)」、あるいは「(吾)歴行天下、周求名山、入神農之故郷、得胡公之精術。」(「冬夜于随州紫陽先生餐霞楼送煙子元演隱仙城山序」と、随州が神農から胡紫陽に至るまで、神仙を崇める風習のある土地柄であると称揚する。また、春秋随国と言えば賢臣・季梁(「良」)の名が印象に残るが、李白はそれも忘れない。「江夏送情公婦漢東」の序に「夫漢、東之國、聖人所出、神農之後、季良為大賢、爾來寂寂、無一物可紀、有唐中興、始生紫陽先生。」と、随州が神農・季梁など賢者の輩出する土地柄であることを語り(ただし、同時に「爾來寂寂として、一物として紀すべし無し」と、暗に随州の名勝古跡の乏しさを認めるところも興味深い)、さらにその詩に「彼美漢東國、川藏明

月輝。寧知喪乱後、更有一珠婦」と、随州の山水の美についても言及している（むろん「明月」は賢者の隠喩でもある）。その随州の自然に関し
て言えば、「相隨迢迢訪仙城、三十六曲水迴繁」（憶旧遊寄譙郡元參軍）と、仙城山の風光を讚える句も存在する。

唐州関係の土地については、詩六首、文一篇に登場しているが、李白の関心は、随州同様、土地そのものよりも、人物（とりわけ親友の元丹丘）
に集中している。地名としては「方城」「方城寺」「高鳳石門山」「高鳳遺跡」のように、唐州方城県・汝州葉県の境界に横たわる方城山及び石門
山関係のものがほとんどであり、しかも語られる内容は元丹丘との交遊が中心で、「詩跡」論的にはそれほど見る価値はない。ただ、石門山につ
いては、「高鳳石門山」「高鳳遺跡」といった表現にも見られるように、後漢の隱士・高鳳ゆかりの地であることをしきりに強調しようとしている
点は注目してよいであろう。著名な人物が訪れたことがあり、その遺跡も存在するという点を強調することによって、この山を読者の印象に残そ
うという、李白らしい土地讚歌の姿勢が感じられるように思われるのである。

四、鄧州と「南都行」を中心に

李白が言及した鄧州関係の地名については、「南陽」「南都」「宛」「白水」「白河灣」「紅陽城」「石激」「清冷泉」「独山」「菊潭」等が詩文中から
見出される。作品数にして、詩十首、文一篇となる。李白は鄧州の名勝古跡をかなり活発に遊覧したらしく、南陽城外の白水石激に登っては、
「朝涉白水源、暫与俗人疏。島嶼佳景色、江天涵清虚。目送去海雲、心閑遊川魚。長歌尽落日、乘月帰田廬。」（遊南陽白水登石激作）と歌い、
南陽城東北郊外にある名所清冷泉に遊んでは、「惜彼落日暮、愛此寒泉清。西輝逐流水、蕩漾遊子情。空歌望雲月、曲尽長松声。」（遊南陽清冷泉）
と歌っている。また、後になって崔宗之との旧遊を回想して歌った詩（「憶崔郎中宗之遊南陽遺吾孔子琴撫之潸然感旧」）には、「昔在南陽城、唯
餐独山蕨。憶与崔宗之、白水弄素月。時過菊水上、縦酒無休歇。泛此黄金花、頽然清歌發。…」とあり、南陽城や独山（南陽の西約一五キロ）だ
けでなく、遠く菊潭県菊水（南陽の西約九〇キロ）にまで足をのばしている事がわかる。

鄧州は、中国を大きく南北に分ける秦嶺山脈の南麓に位置するという地理的条件、先秦の時代から秦楚を分ける国境地帯であったという歴史的
背景もあいまって、名勝古跡は決して少なくない。しかし、中でも最も注目に値するのは、言うまでもなく天下に名高い南陽城（南都）である。
ここは、後漢・光武帝の創業時の拠点、統一後の洛陽の陪都として知られ、また後漢時代の辞賦を代表する張衡「南都賦」の舞台としても知られ
る、政治的にも文学的にも非常に印象的な都市である。唐代に至っても陝西・河南・湖北を結ぶ交通網の一大拠点として、なお重要な役割を果た
し続けている。この南陽城を歌った作品の中で、李白自身においても、また土地文学史上においても、とりわけ重要な意味を持つと考えられる作

品が、以下に挙げる「南都行」である。

南都行

南都信佳麗、武闕横西関。
 白水真人居、万商羅鄼闕。
 高楼对紫陌、甲第連青山。
 此地多英豪、邈然不可攀。
 陶朱与五羖、名播天壤間。
 麗華秀玉色、漢女嬌朱顔。
 清歌遏流雲、艷舞有余閑。
 遊遊盛宛洛、冠蓋隨風還。
 走馬紅陽城、呼鷹白河湾。
 誰識臥龍客、長吟愁鬢斑。

李白はまず「南都 信に佳麗」と、総括的に南都を賛美し、次いで「武闕 西関に横たはる」と、その土地を巨大なスケールの地理の中に位置付ける。しかも、詳細は以下に述べるが、この二句は読者に対して、李白自ら張衡「南都賦」を意識して作ったものであることを宣言している部分でもある（張衡「南都賦」の冒頭部分「於顯樂都、既麗且康。…爾其地勢、則武闕、閼其西。」を踏まえる。「武闕」は山名。さらに、第二聯・第三聯は、大掴みに南都が天下に知られるゆえんであるところの二大特徴、即ち光武帝ゆかりの地であることと、交通の要衝であるがゆえに商業が盛んであることを述べ、その町並みの豪勢さを歌う。続く第四聯以下の六句は、この地ゆかりの著名人として男女四組、即ち陶朱公范蠡（南陽の人）、秦の五穀大夫百里奚（南陽〔宛〕に逃亡し穆公に発見される）、光武帝皇后陰麗華（南陽郡新野の人。「妻を娶らば当に陰麗華を得べし」と光武帝に称賛された美女）、漢皋の二遊女（周の鄭交甫に出会い珠を贈った二人の神女。漢皋は山の名で、襄陽にあるが、漢代には広く南陽郡の一部。張衡「南都賦」にも「遊女弄珠於漢皋之曲」とある）を挙げる。二遊女を除く三人は張衡「南都賦」には登場しておらず、従って、李白自らが歴史上から見つけ出し新たに加えたことになる。南都を多くの著名人と結び付けることによって一層称揚しようとする、李白の苦心の跡が

うかがわれる。第七聯では、これら美女のイメージを承けて、「清歌」「艶舞」のある娯楽性豊かな魅惑的な街であるという、南都の今一つの側面を歌う。第八聯・第九聯は、この都市の豪勢さたるや、宛・洛一帯の中でも際立ったもので、高位高官たちさえ数多く集まって来るほどであり、また、その郊外も遊覧の地にふさわしく、馬を走らせたり鷹狩りすることもできると、その繁栄の様子を讃えている。この四句は同時に、過去の詩歌中にも南陽（宛）が歌われていることを、読者に喚起させる仕掛けにもなっていることに注意したい。つまり「古詩十九首、其三」の「駑車策驚馬、遊戯宛与洛」、謝朓「和徐都曹」の「宛洛佳遊遊、春色滿皇州」という、いずれも『文選』に掲載されている知名度の高い作品の句を下敷きにしたことを示すことによって、南陽が文学史的にも幾度も登場する重要な（しかも遊覧にふさわしい）都市（詩跡）であることを改めて読者に印象付けているのである。李白は序盤に張衡「南都賦」を持ち出し、中盤に歴史上・伝説上の重要人物を挙げ、さらにここで「古詩十九首」と謝朓の詩を読者に喚起させるなど、立体的・重層的に南都の魅力を描出し、かつ称揚しているわけである。

最終聯は、さらに今一人、南陽ゆかりの重要人物として欠くべからざる人傑、即ち諸葛亮孔明を引き合いに出し（前述したように諸葛亮の隠棲地は隆中であるが、漢代には南陽郡に属している。「出師表」に「臣本布衣、躬耕南陽。」とある）、南都が、孔明の愛国の悲壮感をも忘れさせてしまうほどの繁栄を誇っていると讃えて、一篇の終わりとしてしている。むしろ、この聯は、懐才不遇をかこつ李白が自らを孔明に喩えて、忿懣の情を吐露したものと見ることも不可能でない（事実そう解釈するものも多い¹⁶）。しかし、一首全体のバランスを考えた場合、それまで繰り返し南都の街を賛美してきて、最終聯に至って唐突に、才能ある人物の嘆きを南都の人々は「誰」も「識」ろうともしないなどといった、南陽人を侮辱するような発言を果たして李白がするであろうか。むしろこの聯は、この詩全体に流れる明るさ、洗刺さから考えて、李白一流のユーモアと見做すのがよいであろう。南陽を語るに諸葛亮を落とすわけにはいかない、しかし、一方で諸葛亮の持つ悲劇性はこの南都のムードにはそぐわない、というアンビバレントを解消するには、諸葛亮の暗さを吹き飛ばすほど南都の街は明るく楽しいといった、いささか諧謔的ではあるがユーモア溢れる方向にもつていかざるをえなかったと考えるほうが、解釈としてははるかに自然ではなからうか。

この作品が文学史的に重要な意味を持つのは、「土地文学」、とりわけ「都市」を描く文学（以下「都市文学」とする）の流れの中に位置付けるときである。序論においても若干触れたが、中国文学においては、すでに漢代から「都市文学」は、辞賦のジャンルの中で重要な地位を占めていた。周知の通り、班固の「西都賦」「東都賦」、張衡の「西京賦」「東京賦」「南都賦」、左思の「蜀都賦」「呉都賦」「魏都賦」は『文選』の冒頭に配されている。しかし、李白の時代に即して考えた場合、文学の主流が辞賦から詩歌に移っていった、いわば過渡期の時代に当たる唐代の文学者たちが、辞賦においてはすでに頂点を極めていた「都市文学」を、新たな表現手段たる詩歌の中で、いかに再構築し、その独自性を引き出そうとしたか、といった点が重要な問題となる。その意味で、すでに初唐の段階で、虞世南「賦得呉都」、李百葉「賦得魏都」、盧照鄰「長安古意」、駱

賓王「帝京篇」、張説「鄴都引」等、首都級の大都市を描いた詩歌が散見できるのは、極めて示唆的であり、検討を要するが、本稿ではとりあえず張衡「南都賦」と李白「南都行」との比較を通してその問題を考えてみたい。

張衡の「南都賦」も含めて、辞賦における都市の描かれ方は、総じてパノラマ的、絵巻的である。その都市の位置・山川・物産・草木鳥獸・歴史伝統等をひたすら詳細に羅列・敷陳していくことによって、可能な限りその都市の「全体像」を浮き彫りにしていこうとする傾向にある。従って分量的にもかなり長大な作品が多い（「南都賦」の場合、約千六百字）。一方、李白の「南都行」（二十句百字）を見てみると、彼がいかにイメージの凝縮に心を砕いているかがわかる。「南都賦」のように、ひたすら多くの情報を羅列的に提示することによって南都を多角的・全体的に描き出すのではなく、南都のもつ多くの属性の中から、描くべきポイントをいくつかの少数の要素に絞りこみ（①南都の地勢、②南都の栄光と繁栄、③南都ゆかりの著名人、④遊覧・観光の地としての南陽）、その中でとりわけ特徴的な事象を抽出し（①武闕山の麓にある佳麗な都市である、②光武帝ゆかりの地、商店・高級住宅が軒を連ねる、③范蠡・百里奚・陰麗華・漢水神女・諸葛亮等、全国レベルの著名人がいる、④豪遊ができる、歌舞を楽しむ、紅陽城、白河湾まで足を延ばせる）、それを誇張をも含めたインパクトのある表現でもって描き出すといった手法を用いている。ある一つの都市を真相に即して綿密に描き出すのではなく、その都市の持つ特徴的な個性にのみ焦点を絞り、それを凝縮した表現で印象的・魅力的に典型化して描き出すわけである。観光ガイドブックにたとえるならば、李白のそれは見出しのタイトル、あるいは都市を宣伝するためのキャッチフレーズに相当すると言えよう。可能なかぎり短い文句で、集約的にその都市の魅力を語り尽くす、しかも詩という文体であるがために、リズムミカルであり人々の記憶に残りやすい——李白の「南都行」は、まさに詩の持つ特性を最大限に生かした土地讃歌であると言えよう。さらに付言するならば、李白がこの詩を歌行体・歌吟体の作品としている点は注目に値する。つまり、この詩を楽曲に乗せることができれば、より一層魅惑的に南都の名を天下に、あるいは後世に知らしめることができるという、李白の期待が込められていると考えると考えて間違いないであろう（土地讃歌と歌行体との関係については次節以下に詳述する）。

李白の作品が、その土地々々において愛唱され続けている要因を考えるに当たって、この「南都行」は象徴的な意味を持つと言えよう（しかも張衡「南都賦」という知名度の高い先行例があるがゆえに、その特色はより一層明確に浮き上がってくる）。土地というものが詩と出会うことによつて、そのイメージさえ変質させられていくという「詩跡」論の立場からも、「南都行」を含めた李白の土地歌は再検討される必要があるように思われるのである。

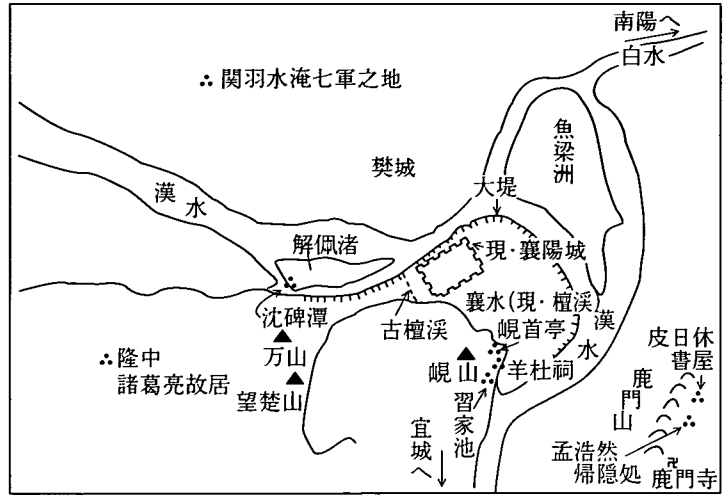
五、襄州襄陽の「岷山懷古」「襄陽曲四首」「襄陽歌」を中心に

襄陽は、岷山・万山・鹿門山といった優美な山々に囲まれ、漢水・白水（現在の唐白河）といった清らかな緑水に抱かれた、山水豊かな都市として、あるいはまた古来から中国の南北を繋ぐ交通の要衝として開けた、商業盛んな繁華な都市としてその名を知られている。また、歴史的にも文化的にも詩的素材の宝庫と言つてよい。漢水神女解佩渚、養由基故里、劉表斃孫策処、鹿門山龐徳公采藥処、徐庶宅、蔡瑁故里、劉備馬躍檀溪処、諸葛亮臥龍岡、龐統宅、岷山羊祜墮淚碑、漢水杜預沈碑潭、あるいは山簡ゆかりの習家池、朱序母韓氏の夫人城、樂府「大堤曲」で知られる大堤（老龍堤）等々、数多くの名勝古跡が散在する。

唐代においても、すでに李白以前、李白「漢水經襄陽」、張九齡「登襄陽山」、宋之問「使過襄陽登鳳林寺」、崔湜「襄城即事」「襄陽作」、杜審言「登襄陽城」、陳子昂「岷山懷古」、張說「襄州景空寺題融上人蘭若」等、襄州・襄陽関係の作品は多数見出される。

中でも重要な詩人は言うまでもなく孟浩然である。孟浩然に至つて、襄陽における「詩跡」はほぼ出揃つたと言つて過言ではないであろう。現存する孟浩然の詩及びその詩題から、襄州・襄陽関係の地名を抜き出してみると、襄州（一首）、襄陽（四首）、漢川（三首）、漢江（一首）、襄水（一首）、漢臯（一首）、望楚山（一首）、岷山（十二首）、岷首（四首）、江岷（一首）、岷潭（一首）、万山（三首）、鹿門（山）（五首）、習（家）池（三首）、高陽池（一首）、襄陽公宅（一首、習郁宅のこと）、羊公碑（一首）、龐公棲隱処（一首）、崔徐跡（一首、崔州平・徐庶宅のこと）、檀溪（二首）、漁梁（一首）、漁梁渡（一首）、大堤（二首）、鳳林寺（一首）、白鶴巖（一首）、冶城（一首）、涇湖（一首）、澗南園（二首）となり、これだけでも、孟浩然がいかに多くの地を歌っているかがわかる。また、作品的に見ても、「登鹿門山懷古」「秋登万山寄張五」「万山潭作」「夜歸鹿門歌」「与諸子登岷山」「岷山送蕭員外之荊州」などのように、しばしば唐詩の選集・傑作集等に加えられている、評価の高い作品も少なくない。

従つて問題は、このように先行例が多数存在するという状況下で、李白がいかに自らの個性を際立たせ、彼なりの襄陽像を描き出しているかという点に絞られてくるであろう。とりあえず、李白の作品の中で襄州・襄陽関係の地名が含まれているものを整理してみると、全十四首、地名としては「襄陽」「襄中」「岷山」「岷首」「荆襄」「墮淚碑」「羊公石」「山公樓」「習家池」「高陽池」「大堤」「鹿門」「涇湖」などが挙げられる。一応、襄陽を代表する「詩跡」は一通り歌われていると見てよいであろう。これらを細かく見ていくと、李白の独自性は自ずから明らかになっていくように思われる。例えば岷山の扱ひ方であるが、それまでの岷山を歌つた代表的な作品群と比較してみると、かなりの差異が見出される。



〈地図2〉 襄陽一帶

峴山懐古
 訪古登峴首、憑高眺襄中。
 天清遠峰出、水落寒沙空。
 弄珠見遊女、醉酒懷山公。
 感嘆發秋興、長松鳴夜風。

峴山と言えは、ふつうまず山頂にある羊祜の墮淚碑が思い浮かぶ。先行作品を見ても、陳子昂「峴山懐古」に「猶悲墮淚碣、尚想臥龍圖」とあり、張九齡「登襄陽峴山」に「蜀相吟安在、羊公碣已磨」とあり、孟浩然「与諸子登峴山」に「羊公碑尚在、詭罷淚沾襟」とあり「盧明府九日峴山宴袁使君張郎中崔員外」に「叔子(羊祜の字)神如在、山公興未闌」とある(陳子昂・張九齡が諸葛亮を登場させていることも注意されてよい)。これに対して李白は「峴山懐古」と題しながら、峴山にとって最も重要な人物であるはずの羊祜を登場させず、さらには先達らとその対として用意した諸葛亮をも取り上げず、却って、ともすれば軟弱とも言える、艶冶な漢水の遊女(二神女)と、酔狂で知られる自由人・山簡を登場させている。しかし、この点にこそこの詩の独自性が隠されているように思われるのである。つまり、第二聯の「天清く遠峰出で、水落ちて寒沙空し」、第四聯の「感嘆 秋興を發し、長松 夜風に鳴る」と言った表現からも感じ取れるように、この詩全体の雰囲気は「悲秋」ではなく「清秋」であり、その清ら

かな秋の情趣(「秋興」)に触発されての懐古の情である。このような詩境にあつては、幻想的な川の精霊、興趣を解する風流人こそ懐古するにふさわしい。悲哀や沈痛な涙を連想させる羊祜・諸葛亮は、どうしてもこの「清秋」のさわやかな雰囲気にはそぐわないのである。

こういった李白の懐古感覚は、この作品が直接に下敷きにしたと考えられる孟浩然の「与諸子登峴山」(「人事有代謝、往來成古今。江山留勝跡、我輩復登臨。水落漁梁淺、天寒雲夢深。羊公碑尚在、詭罷淚沾襟」)と比較するとき、一層明らかになるであろう。強いて言えば、孟浩然のそれが人事の推移に対する悲哀という面に重点が描かれているのに対し、李白のそれは、峴山に登ることによって、「詩跡」豊かな都市・襄陽の全体像を眺望することができたという感動を、興趣に任せて楽しんでいくといった感が強い。ちなみに李秋弟「詩

仙游踪、李白与名山勝景』(P.45)は、この二篇を比較して、「詩人(孟浩然を指す)看罷人們懷念羊祜德政的碑文、就和一般後世的百姓一樣、不禁被羊公的愛民与勤政感動得潸然淚下。詩人想到自己年光過尽、功名無望、於是自傷自怨、這是孟浩然登山墮淚的另一個原因。孟浩然詩歌風格是比不上李白的俊逸・洒脱的。因為李白看到先賢遺跡、往往是懷古勵志、豪氣滿懷、躍躍欲試。即使有点牢騷也是如過眼烟雲、轉瞬即逝——就是在李白的晚年也同樣是如此。李白的這種開朗洒脱是許多名人所不及的。」(傍点寺尾)と指摘する。

確かに李白の懐古詩は、「登金陵鳳凰台」「金陵城西樓月下吟」「赤壁歌送別」「蘇台覽古」「越中覽古」のように、沈痛なセンチメンタリズムが抑制され、独特の明るさ・爽快さ・洒脱さ・力強さを感じ取れるものが多い。換言すれば、感傷はあっても、それを昇華させ浄化させることによつて一種の爽快感(いわばカタルシスのようなもの)を引き出すといった作風の懐古詩が多い。この「峴山懷古」はそういった李白懐古詩の典型例の一つと見ることが可能であろう。いずれにせよ、李白はあえて「清秋」のイメージを導入することによって、峴山即羊祜墮淚碑といった固定觀念から脱却し、新たな峴山(ないし襄陽)懐古の可能性を追求しようと試みたのではないだろうか。

その、新たな襄陽像といった意味で興味深いのは、次の「襄陽曲四首」である。

襄陽曲 其一

襄陽行樂処、歌舞白銅鞮。

江城回淥水、花月使人迷。

其二

山公醉酒時、酩酊高陽下。

頭上白接籬、倒著還騎馬。

其三

峴山臨漢江、水綠沙如雪。

上有墮淚碑、青苔久磨滅。

其四

且酔習家池、莫看墮淚碑。

山公欲上馬、笑殺襄陽兒。

この一連の作品は、李白の他の連作、例えば「秋浦歌十七首」「上皇西巡南京歌十首」と同様、詩中に多くの地名を盛り込んだ、典型的な李白の土地歌と見做すことができよう。「襄陽」(二例)「高陽(池)」(一例)「峴山」「漢江」「墮淚碑」(二例)「習家池」と、わずか四首八十字中に八例もの地名が含まれている。周知のように、この作品は、樂府の旧題を用いたもので、その伝統を継承するものであるが、他の作例(『樂府詩集』に収められる「襄陽樂九首」、張祜「襄陽樂」、崔国輔「襄陽曲二首」、施肩吾「襄陽曲」、李端「襄陽曲」、梁・武帝「襄陽蹋銅蹄三首」、沈約「襄陽蹋銅蹄三首」(以上卷四八)、「襄陽童兒歌」(卷八五))と比較してみても、やはり地名頻度の高さにおいて、李白のそれは際立っている。

さらに言えば、従来の作例の多くが、襄陽の若き男女の交情に重点を置くのに対し(その意味では、李白の「大堤曲」(「漢水臨襄陽、花開大堤暖。佳期大堤下、淚向南雲滿。春風復無情、吹我夢魂散。不見眼中人、天長音信斷。」)は旧来の「襄陽樂」「襄陽曲」「大堤曲」等の伝統を継承している)、李白のそれはあたかも、襄陽の名勝古跡案内、襄陽宣伝のためのキャッチコピーといった感を呈している。「其一」は襄陽全体の雰囲気明るく描き出す。歌舞あり山水ありの行楽の地としてのイメージを強調する。「其二」も、この地の著名人の中から、あえて明るくユーモラスなイメージを持つ山簡を取り上げ、その滑稽な醉態を描写することによって、襄陽の愉快で自由なムードを引き出している。「其三」は、襄陽のランドマークであり、しかも襄陽市内を一望できる景勝地ということで、当地最大の遊覧地たる峴山を登場させる。当然のこととして墮淚碑を登場させることも忘れないが、沈痛な悲哀の趣きはなく、むしろ、せつかく峴山を訪れたなら、一度は見えておきたい名所、といった観光ガイド的な感覚である。「其四」は、襄陽の明るいムードをさらに際立たせるために、再び山簡を登場させる。襄陽の二つの名所、習家池と墮淚碑を紹介しながら、無邪気に笑いこぼる子供らの明るい笑顔(18)を讀者に印象付けつつ全編を完結させている(第二句の「墮淚碑を看る莫れ」といった、襄陽の暗部を吹き飛ばすかのような発言も興味深い)。その意味で、「其一」冒頭の「襄陽 行樂の処」と「其四」最終句の「笑殺す襄陽の兒」はみごとに対応を見せると言えるであろう。

李白は伝統樂府に見られた襄陽庶民の甘味な恋のかけひき——その歡樂のイメージは借用しつつも、男女の恋歌的なイメージは捨象し、代わってその土地の著名人・名勝古跡を十全に活用することによって、この樂府題を、土地そのものを描き出す土地讚歌の文学に変質させているのである。しかも、その李白の描き出す襄陽のイメージは、『觀光資源の多い、華やかで愉快な行樂の地』(古辞「襄陽樂」の「人は言ふ襄陽は樂し」と

いう側面をクローズアップしたと考えられる)であり、これは孟浩然には総じて希薄であった側面である。むしろ孟浩然とて「山水形勝を觀れば、襄陽 会稽よりも美し」(「登望楚山最高頂」と、襄陽を賛美することは忘れておらず、また、その描き出すところの襄陽は極めて清冽で美しい。しかし孟浩然の襄陽讚歌の多くは、あえて言うならば、故郷たる襄陽の山水美を觀賞し堪能したいという自身の内的欲求の具現化であり、他者に向かつては多く開かれてはいない。俗な言い方をすれば、襄陽在住者以外の第三者(觀光客・旅行客)をもターゲットとするような「客寄せ」的なフレーズに乏しいのである。これに対し、李白の場合、①宣伝文句的に他者に襄陽の魅力を訴える、②襄陽の明るさ楽しさを強調する(「岷山懷古」も、ともすれば暗いイメージとなりやすい羊祜・諸葛亮を避けている)、といった点に重点が置かれ、ここに襄陽文学史における彼の独自性が見出されるように思われるのである。

なお、この「襄陽曲四首」は唐代においてもすでに一定の評価があったようで、中唐の李涉の「漢上偶題」(『全唐詩』卷四七七)に「謫仙唐世游茲郡、花下聽歌醉眼迷。今日漢江煙樹尽、更無人唱白銅鞮」とある。やはり李白の描いた「華やかな襄陽」のイメージを読み取っている作例と言えよう。

次に挙げる「襄陽歌」は、単に李白の代表作というばかりでなく、襄陽を歌った中国文学作品の歴史の中でも最も影響力のある作品の一つとすることができると言える。この作品によって、李白の名は襄陽において、龐徳公・諸葛亮・羊祜・杜預・山簡・孟浩然・皮日休らとともに忘れえぬ存在となつたと言つても過言ではないであろう。

襄陽歌

落日欲没岷山西、倒着接離花下迷。

襄陽小兒齊拍手、攔街爭唱白銅鞮。

傍人借問笑何事、笑殺山公醉似泥。

鷓鴣杓、鸚鵡杯。

百年三萬六千日、一日須傾三百杯。

遙看漢水鴨頭綠、恰似葡萄初醱醅。

此江若變作春酒、壘麹便築糟丘台。

千金駿馬換小妾、笑坐雕鞍歌落梅。

車傍側挂一壺酒、鳳笙籠管行相催。

咸陽市中嘆黃犬、何如月下傾金罍。

君不見晋朝羊公、一片石、龜頭剝落生莓苔。

淚亦不能為之墮、心亦不能為之哀。

清風朗月不用一錢買、玉山自倒非人推。

舒州杓、力士鎗、李白与爾同死生。

襄王雲雨今安在、江水東流猿夜声。

李白はまず、「落日没せんと欲す 岷山の西」と、襄陽最大のランドマーク・岷山を登場させ、次いで「接離を倒着して花下に迷ふ」と、泥酔する自己の像を描き出し、同時に「接離」の語によって、襄陽を代表する風流人・山簡の登場を読者に予感させる。以下、自分を完全に山簡とだぶらせ、襄陽での飲酒の楽しみを豪快に活写する。とりわけ「百年三万六千日、一日須らく三百杯を傾くべし」は、周知のように、後世「酒好きの李白」「酒仙李白」というイメージを決定的にした句の一つである（この「襄陽歌」は開元二二（七三四）年、李白三十四歳頃の作とするのが通説であるが、そうであるとすれば、この作品は、制作年代がほぼ確定できる作品の中で、李白が飲酒を詩に歌った最も早期の作品の一つと言える、という点も注意されてよい）。続く「遙かに看る 漢水 鴨頭の緑のごとく、恰かも似たり 葡萄初めて醞酑するに。此の江 若し変じて春酒と作らば、罌麴 便ち築かん糟丘の台」（「糟丘台」は「大堤」を想定しよう）は、その大胆な誇張的比喩によって後世広く知られるようになったばかりでなく、後述するように、以後の襄陽付近の漢水のイメージを決定的に規定することになる。さらに続く「千金駿馬小妾に換へ、…」以下六句は、単に飲酒・観妓の楽しみを奔放に謳歌しているというだけでなく、すでに「襄陽曲四首」で見えてきたように、襄陽の、酒あり歌舞あり美女もあり、といった行楽にふさわしい都市としてのイメージを言外に含ませており、その意味において、決して「襄陽歌」というタイトルから逸脱してはいない。さらに「君見ずや晋朝の羊公一片の石、龜頭剝落して莓苔の生ずるを。涙も亦た之が為に墮つる能はず、心も亦た之が為に哀しむ能はず」は、「岷山懷古」「襄陽曲四首」においても指摘したように、襄陽在住時における李白の、羊祜墮涙碑に対する一貫した態度である。むしろ李白は、襄陽人の最も尊崇する羊祜を軽んじていたわけではないであろう。襄陽最大の著名人たる羊祜の悲哀をあえて打ち消すことによつて、それをバネに力強く現世を、あるいは襄陽の楽しみを謳歌しようという、一種の抑揚表現と見るべきである（例えば李白は後に襄陽での旧遊を懐かしむ詩を書いているが（「憶襄陽旧遊贈馬少府巨」）、その詩の末尾には「帰心結遠夢、落日懸春愁。空思羊叔子、墮淚岷山頭」とあり、外

地にあつて襄陽への回帰願望が悲しみとともにつる際には、激しく羊祜を追慕している。「清風朗月一錢の買ふを用ひず、玉山の自ら倒るるがごとく人の推すに非ず」も、蘇軾の「前赤壁賦」に転用されているように、極めて広く知られた名句であるが、「詩跡」論的に見ても、襄陽のイメージを「清風朗月」と集約的に喝破している点、興味深い。また「李白 爾と死生を同じうせん」の句は、自分の姓名を詩中に盛り込むなど、いかにも奔放な李白らしいが、同時に「舒州杓、力士鎗」に盛られた酒を「爾」と擬人化している点もまた李白的特点である。最終句は、襄陽と同じく楚の旧地ゆかりの著名な故事（「巫山雲雨」）を引き合いに出して、一首の結びとしている。

この詩は、いかにも李白的と言える。「飲酒」というモチーフを軸にしており、また随所に当地の著名人や名所旧跡を巧みに織り込んでおり、さらにはその表現も、比喩あり擬人法あり誇張表現ありといったように、李白詩の個性・魅力がいかなく発揮されている作品であると言えるであろう。しかも注目すべきは、この作品が歌行体・歌吟体（以下「歌行体」と称する）に属しているという点である。李白の歌行体が、中国の歌行体詩の歴史において重大な転換をもたらしたことについては、すでにいくつかの指摘がある。例えば松浦友久「楽府・新楽府・歌行論」表現機能の異同を中心に」（『中国詩歌原論』¹⁹）所収）は、李白（及び岑参）が歌行体に「一人称的手法を投入」したと指摘し、さらに松原朗「盛唐期における歌行の展開」李白の一人称的歌行を中心に²⁰は、その松浦論文を一層推し進めて、李白の歌行においては「①土地の景物を客観的に描写した部分と、②作者自身の交遊にまつわる体験や心情を述べた部分とに截然と分かれるような、特徴的な構造をもつ作品群を認める」ことができ、それは歌行の歴史において「空前の試み」であったと指摘しつつ、さらにこのような歌行は「つきつめて言えば、徒詩的な一人称性と、歌辞的な三人称性とのあやうい均衡のうえに築かれた様式」であると論じている。さらに郁賢皓「李白楽府与歌吟異同論」²¹は、この松浦・松原論文を踏まえつつ、李白の大多数の歌行体について、「以地名、人名、和事件作為題目、一眼就可看出是為其地、其人、其事而歌、而這些詩中的詩句都明確表現特定情景和詩人當時对其地、其人、其事具有的独特個性的思想感情、……」と指摘している。郁論文の場合、特に興味深いのは、李白の歌行体に対して、①土地を歌うもの、②人物を歌うもの、③事件を歌うもの、という三分類を試みていることである。とりわけ、本稿が展開している「土地文学」という観点から見た場合、この①の土地を歌う歌行体の存在は極めて重要な意味を持つように思われるのである。

李白の歌行体を「土地文学」という視点から概観してみると、そこに極めて著しい李白独自の傾向を見出すことができる。かりに「宋本」が「歌吟」として収める八十一首のうち、「××歌」「××行」「××吟」「××詞」等の「××」の部分地名になっているものを合計してみると、「襄陽曲」「南都行」「江上吟」「西岳雲台歌送」「梁園吟」「鳴臯歌送」「鳴臯歌奉餞」「金陵歌送別」「勞勞亭歌」「橫江詞六首」「東山吟」「秋浦歌十七首」「赤壁歌送別」「江夏行」「清溪行」「和盧侍御虛舟塘曲」など、約半数に近い三十八首がこれに該当する。さらに「金陵城西樓月下吟」「峨眉山月歌」「峨眉山月歌送」「鬪歌行上」も内容的には土地を歌うことに重点が置かれており、また「上皇西巡南京歌十首」も、すでに拙

稿「李白における蜀地方の意義」⁽²²⁾において詳述したように、事实上、蜀地方ないし成都の讃歌と言うべき作品である。また、「同族弟金城尉叔卿燭照山水壁画歌」(東海三仙山の図を歌う)や「当塗趙炎少府粉圖山水歌」(峨眉・羅浮・赤城・蒼梧・洞庭瀟湘・三江七沢等の地名が見える。天下の著名な山水が描かれた図か)も、絵画を通してとはいえず、土地を賛美する歌と考えてよい。以上を合計すれば、凡そ三分の二(五十四首)の作品が土地歌ないしは土地に関係の深い作例ということになる。人物をタイトルとする歌行が「元丹丘歌」「扶風豪士歌」「白毫子歌」「僧伽歌」「玉真仙人詞」「歷陽壯士勳將軍名思齊歌」と、わずかに六首であるのに対して、この差は歴然としている。また、「宋本」が「歌吟」に含めない作品の中にも、「廬山謠寄盧侍御虚舟」「夢遊天姥吟留別」「瀾陵行送別」といった李白詩を代表する土地歌行や、あるいは樂府的な色合いが濃くはいえ「越女詞六首」「巴女詞」といった土地と密接に結びついた歌辞系の作例も見出される。

この障目すべき李白歌行体詩の傾向は、どのように解すべきであろうか。確かに、すでに李白以前にも盧照鄰「長安古意」、賈賈王「帝京篇」、陳子昂「登幽州台歌」、張說「鄴都引」、孟浩然「夜歸鹿門山歌」といったように、土地と結びついた歌行体詩はいくつか散見できる。しかし集中的かつ徹底した形でこのような傾向が顕著に現われることは、李白以前においてはついにありえなかつた。その要因は、おそらく李白自身の詩人としての資質、嗜好——土地というものに対する限らない愛着——に求めるほかはないのではあるまいか。生来の旅人たる詩人・李白は、その旅先の各地において、記念碑的に土地讃歌の詩を書き続け、その当然の結果として、それを樂曲に乗せて歌ってほしい、歌にすることによって自らの名を土地の名とともに広くかつ末長く伝えてほしい、といった願望が、土地讃歌の歌行という形をとって現われたのではないだろうか。その意味で興味深いのは、李白の土地讃歌の歌行の多くが、樂器の演奏がつきものの離別、席で発表されているという点である。実際に歌妓たちによって即興的に歌われた可能性は高いと言わねばなるまい。

また、樂府・歌行の対立という面から考えた場合、当然ながら、李白がなにゆえ樂府の旧題に満足できなかつたのか、といった疑問に突き当たると。しかし、これも土地歌という発想から考えると説明がつきやすい。つまり、旧来の樂府では、その取り上げることのできる土地に限界があるということである。「蜀道難」「梁甫吟」「閔山月」「荊州歌」「採蓮曲」「長干行」「幽州胡馬客行」「襄陽曲」「大堤曲」「洛陽陌」「北上行」「子夜吳歌」といったように地方色の出しやすい樂府題は存在するものの、自ずからその数には限りがある。確かに李白は「子夜吳歌」という吳地方のイメージの強い樂府に「長安一片月」と、大胆にも長安を登場させるといったような奇抜な試みをするなど、土地歌としての樂府に対しては様々な工夫を凝らしている。しかし、無数に存在する土地を、その都度歌にしていくなには、やはり新たな歌行体を次々に創造してゆくほかはなかつたであろう⁽²³⁾。また、さらに仮説を建てることが許されるならば、李白の歌行体が、一方で、松浦・松原論文の指摘するように、その一人称的な手法、という側面において、杜甫や岑參の歌行、ひいては元稹・白居易の新樂府運動への道を開いたとするならば、その一方で、今一つの特徴、即ち李

白歌行の土地歌としての側面は、岑参の辺塞歌行は言うに及ばず、ひいては劉禹錫詩に見えるような「華山歌」「紀南歌」「宣城歌」「順陽歌」「馬嵬行」「淮陰行五首」「九華山歌」「龍陽県歌」「竹枝詞九首」等々といった、おびただしい数の土地歌として継承されていったのではないだろうか。いずれにせよ、この「襄陽歌」が、李白詩中、あるいは唐詩における傑作であるという評価を得ているという点は重要な意味を持つ。と云うのは、この作品が流布されるということは、とりもなおさず、土地歌の一つの典型、ないしは一つの有りうべき姿が、同時に伝承されていくことも意味するからである。先に挙げたように、この作品の一部は、蘇軾の「前赤壁賦」に転用されている。やはり土地を詠むる作品に採られているのは象徴的であろう。また、とりわけ愛唱されたのは「遥看漢水鴨頭綠、恰似葡萄初醱醕」の句であるらしく、特に漢水の緑に澄んださまを「鴨頭綠」に喩えた部分は、後世、繰り返し詩に踏まえられている。例えば、唐詩では温庭筠「常林歡歌」（『全唐詩』卷五七五）に「宣城（第二節の「大堤」の条参照）酒熟花覆橋、沙晴綠鴨鳴咬咬」とあり、また『輿地紀勝』卷八二「襄陽府・峴山漢水詩」には「雄鴨頭、看漢水、肥鰻縮項出魚查（梅堯臣）」、「連天漢水鴨頭春、樂府銅鞮艷曲新（楊億）」と、宋代詩人の用例が挙げられている。これらの用例は明らかに李白の影響であるう（なお梅堯臣はこの詩を愛唱したらしく、ほかにも「看雲舉大杓、杓造舒州民。李白嘗愛之、死生曾与均」（『送尹瞻駕部監靈仙觀』）といった作例もある）。まさしく土地イメージの生成を得意とする李白の面目躍如といった感がある。

結論を言うならば、この「襄陽歌」は、李白が新しい歌行体、即ち土地讚歌としての歌行体の可能性を最大限に引き出し、同時に一人称的な手法を導入することによって、その土地歌の中に、酒を溺愛する自らの像も十分に描き出して、自己と土地とをみごとに融和させた作例と言える。この作品が今日においてもなお、李白を語るに不可欠の作品であり、同時に襄陽を語る上でも不可欠の作品となっているのが、そのなよりの傍証となるであろう。

六、結語

以上、安陸・南陽・襄陽と、李白が青年期から壮年期の始めにかけて訪れた地を中心に、彼の土地描写の特色を考察してみた。「代寿山答孟少府移文書」「安陸白兆山桃花巖寄劉侍御結」については、李白が「無名」の山水を讀者に印象付けるために、いかなる苦心を払っているかという点に重点を置いた。また「南都行」については、「都市文学」の、辞賦から詩歌への転換という流れの中で、李白が南都という都市をどのよう特徴づけ、典型化しているかといった点に焦点を絞って考察した。土地の典型化・イメージ化こそ、唐詩の土地歌を考える上での重要なポイントであり、ひいては「詩跡」生成の過程を解き明かす鍵であると考えられるからである。また、「峴山懷古」「襄陽曲四首」については、李白がい

なる襄陽像を新たに生み出そうとしているかという点を問題の中心に据えた。すでに「詩跡」の宝庫たる襄陽において、李白が自らの名を留めるには、他の作品にはない新たな発想が必要だったにちがいない。そして最後に李白詩中の傑作たる「襄陽歌」を挙げ、その成功の要因を、李白の「土地讃歌としての歌行体詩」の発見・開発に求めた。李白の多くの土地讃歌の作品の中でも、とりわけ個性的でしかも成功例の多いのが、彼の歌行体詩であり、その代表的な例が「襄陽歌」である。彼の生来的とも言うべき強い土地愛着が、この新しいタイプの歌行体をも生み出したとすれば、土地と詩人との関係の考察は、詩体論・詩型論等をも含めて、総合的かつ多角的に深めていかなければならない問題となってくるであろう。

【注】

- (1) 「詩跡」については、拙論「李白における武漢の意義」『詩的古跡』の生成をめぐって(中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第十一集、一九九二年)、「李白における宣城の意義」『詩的古跡』の定着をめぐって(同上、第十三集、一九九四年)、「李白と『詩跡』」中国詩の歌枕(大修館書店『月刊しにか』一九九六年六月号)等を参照。
- (2) 「秋浦歌十七首」の基底に流れるイメージが「秋」と「白」であることについては拙論「李白における白色表現について」絶句を中心に(中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第五集、一九八六年)を参照。
- (3) 拙論「李白と九華山の『詩跡』化について」(愛知淑徳大学国文学会編『愛知淑徳大学国語国文』第二十号、一九九七年)を参照。
- (4) 注(1)所掲の論文を参照。
- (5) 注(1)を参照。
- (6) 朱宗堯主編、華中師範大学出版社、一九八六年。
- (7) 梁希傑主編、商務印書館、一九九〇年。
- (8) 中央研究院歴史語言研究所專刊、一九八六年。
- (9) 注(6)を参照。
- (10) 以下の注(14)論文を参照。
- (11) 早稲田大学大学院文学研究科『文学研究科紀要 別冊第十七集』、一九九〇年。
- (12) 注(1)を参照。
- (13) 注(3)を参照。
- (14) 中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第九集、一九九〇年。
- (15) 裴斐・劉善良編『李白資料彙編・金元明清之部』(中華書局、一九九四年)、「一、金元」にも郝經「白兆山」(P.21)、白斑「代白雲山人送李耀婦白兆山建長庚書院序」(P.45)といった作品が紹介されている。明清代に至っては一層多くなっている。

- (16) 例えば郁賢皓主編『李白大辞典』（江西教育出版社、一九九五年）「作品提要」「南都行」の条（劉友竹執筆）に「以臥龍自比、借申用世之意、而興懷才不遇之嘆。」とある。
- (17) 中国戯劇出版社、一九九六年。
- (18) 『晋書』「山簡伝」に「時有童兒歌曰、山公出何許、往至高陽池。日夕倒載婦、茗芋（酪酏）無所知。時時能騎馬、倒著白接躡。拳鞭向葛疆、何如并州兒」とあるのを踏まえる。ちなみに李白は襄陽の歴史人物の中では、山簡を最も敬愛していたらしく、全作品中、「山公」「山翁」の用例は十一例にのぼり、しかも襄陽以外の地で製作した作品の中においても取り上げている。
- (19) 大修館書店、一九八六年。なお当該の論文の初出は一九八二年。
- (20) 中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第三集、一九八六年。
- (21) 『中国李白研究・一九九四年集』（安徽文芸出版社、一九九六年）所収。
- (22) 愛知淑徳大学国文学会編『愛知淑徳大学国語国文』第二十一号、一九九八年。
- (23) 逆に豊富に楽府の旧題が存する河北・河東地域に関しては、李白はほとんど歌行体詩を残していない。詳細は拙論「李白における河北・河東地方の意義と実像と伝承との一体化をめぐる」（愛知淑徳大学国文学会編『愛知淑徳大学国語国文』第二十二号、一九九九年）を参照。